

令和3年度 第3回藤沢型地域包括ケアシステム推進会議 議事要旨

I. 開催概要

1. 開催日時 2021年（令和3年）12月22日（水）
午後4時30分～午後6時30分

2. 開催場所 藤沢市役所分庁舎2階 活動室1・2・3・4

3. 出席者

(1) 委員＝22人（敬称略）

・会場出席者

小林 邦芳、 栃本 親、 大野 貞彦、 川原田 武、 横川 敬久、
浅見 佳代子

・オンライン出席者

石井 由佳、 関根 颯、 大島 崇弘、 澁谷 晴子、 櫻井 康則、
市川 勤、 川村 哲、 吉田 展章、 戸高 洋充、 道端 薫、
小路 成明、 秋山 美紀、 竹村 裕幸、 西山 千秋、 山本 智子、
伊原 敦

(2) 傍聴者＝なし

4. 議題等

1 開会

2 議題

(1) 藤沢型地域包括ケアシステムの取組状況について（全体会）

<資料1>令和3年度藤沢型地域包括ケアシステムにかかるスケジュール

<当日配布資料>第2回庁内検討委員会・専門部会実施報告

<資料2>藤沢市良好な生活環境の確保に向けた支援のガイドライン（案）

(2) テーマ別部会の開催（3グループに分かれる）

<資料3-1>テーマ①「地域活動の活性化について」説明資料

<資料3-2>「地区ボランティアセンター×福祉事業所」について

<資料4-1>テーマ②「ACPの普及啓発について」説明資料

<資料4-2>「あなたの人生会議」について

<資料5-1>テーマ③「複合的な困りごとに対する支援について」説明資料

<資料5-2>「ケアラーのことを知っていますか？」リーフレット

(3) 各部会の振り返り（全体会に戻る）

(4) その他

3 閉会

II. 会議の概要（議事要旨）

1 開会

地域共生社会推進室玉井室長の司会進行により、小林代表の挨拶を受け、議事に入った。

2 議題

議題1. 藤沢型地域包括ケアシステムの取組状況について

《資料1 および当日配布資料にもとづいて、事務局より説明》

《質疑》

なし

議題2. テーマ別部会の開催

以下の3つのテーマに対して、グループに分かれて意見交換を行った。

- ・テーマ①「地域活動の活性化について」
- ・テーマ②「ACPの普及について」
- ・テーマ③「複合的な困りごとに対する支援について」

<テーマ①「地域活動の活性化について」>

参加者：大島委員、市川委員、川村委員、櫻井委員、大野委員、浅見委員、
横川委員、西山委員、

市社会福祉協議会：倉持参与、村上次長（事務局）

地域共生社会推進室：玉井室長、浅野主幹、棚澤（事務局）

～地域活動やボランティア活動に多くの方が参加してもらうために、「理想的な取組（あったらいいな）・ポイント」や「うまくいった事例」について意見交換～

【理想的な取組（あったらいいな）】

- 地域住民の関心があることをテーマにしたイベントを開催し、そこに参加することを入り口として、地域活動を知ってもらうきっかけとなり、最終的には地域活動に参加してもらうなど、流れが重要。
- 地域の中心は市民センター・公民館のため、地域で活動したいと思いを持っている人の情報をキャッチし、市民センター・公民館がコーディネーターとして地域活動とマッチングできるとよい。
- 人の輪（コミュニティ）を生かし、そこから各種活動に流せれば。
- 民間企業との連携がよりできるとよいが、地域団体等はその情報を知る機会が少ない。そのため、知る機会やマッチングの仕組みがあると、民間企業の活用が進む。
- 助けてほしいときに、助けてくれるあらゆる主体とマッチングする仕組みがあるとよい。

- 神奈川県「SDGs つながりポイント事業」など、敷居が低く自然に参加できる仕組みを検討できれば。現行の市のポイント制度は対象範囲が定まっているため、広く参加できる仕組みになれば。
- 「担い手を確保・取り込む」ではなく、「関心があるところに取り込まれる」という視点が重要。例えば、「大学の学生を活用する」ではなく「大学の授業に役に立ってないか」と考えることで、連携が生まれやすい。
- 団体に参加することが生きがいになっている方が多いと、世代交代は進まず、高齢化が進む一方のため、新たな生きがいを作るきっかけが重要。そこが世代交代につながることもある。

【うまくいった事例】

- 長後地区では地区ボランティアセンターの担い手として、障がい事業所が連携して、障がい者が登録・活動している。
- コロナ禍を踏まえ、公園体操などの外での交流機会の創出に取り組んでいる。そのようにネットワークをつくり、話ができる機会を作っている。
- 世代交代がうまくいった事例として、全てを次世代に任せ、一切口出しをせず、困ったときだけ助けるといったスタンスにした団体は、非常にうまく世代交代ができた。
- 忘年会に人を呼び、そこから老人会に参加したといった事例がある。
- LINE を活用して情報発信やフリートークの場を設けたところ、会員同士の距離が近くなり、会員の減少どころか増加につながった。会員と役員の会話の機会を増やすことが重要。

【課題・ポイント】

- 地域活動の参加について、大々的な周知よりも知っている人からの声掛けの方が効果的
- 地域活動やボランティアが「楽しい」と思わせることが重要。
- SDGs を共通テーマに取組が企画できると、あらゆる主体を巻き込みやすい。
- 民間企業や大学などの関心があるところの取り込み方を検討できれば。
- 取り込もうとすると逃げられるので、こちらから取り込まれる。
- 40、50代が地域活動に参加・応援してくれるにはではなく、40代、50代を応援するにはと考える。
- 小さな体験ができる機会をつくると、そこから生まれるものもある。
- 外国籍の地域参加やボランティア参加は難しい。
- あらゆる工夫により、会員数は増加したが、役員のなり手は増えない

<テーマ②「ACPの普及について」>

参加者：小林代表、川原田委員、石井委員、関根委員、澁谷委員、秋山委員、
竹村委員

市社会福祉協議会：（事務局）小野常務理事

高齢者支援課（事務局）：内田課長

地域医療推進課（事務局）：林課長補佐

健康増進課（事務局）：中野課長補佐

地域共生社会推進室：（事務局）山中室長補佐、石田主査

～ACP（アドバンス・ケア・プランニング）の概念や対象者について整理をした
うえで、効果的な普及啓発について意見交換～

【ACPの考え方（概念）】

- 本人のやりたいこと、したいことの蓄積を医師や家族と共有することであると考
える。
- 明治地区・片瀬地区におけるそれぞれの人生会議イベントの考え方のように、「自
分らしい生き方」という視点と「人生のしまい方」という視点とあると思う。
 - ・生き方：仕事、趣味、健康、財産、相続、終末期に向けた意思確認、見取
 - ・しまい方：仕事や趣味の部分よりも、意思確認や見取りの視点 など
- よい形で死んでいくというのはプレッシャー。ACPをやろうと、かまえずとも、
家族と情報共有できるツールとして、自然に（しまい方という方向に）向かって
いくことが理想。
- 元気なうちに終末医療についてきちんと考えていても、いざ症状が急変して死に
直面すると違う形になることが多い。
- 「死」を自分事として捉えていないACPは空虚な議論である。「死」が近づいて
初めて「死に方」が決まる。

【家族の視点（対象）】

- 終末期の治療について、本人がどうしたいか、というよりも、家族が納得できる
か、といった趣旨のほうが強く感じる。
- 県外などに住んでいると、親の老いが見えず、「ずっと元気」だろうと思いつ
んでしまう。健康を保っていても少しずつ老いてくる、本人も家族もそれをどう
やって受けとめていけるようにするか。
- 同居していない家族は、かかりつけ医が分からないことが多い。本人が何を大切
にしていたのかなど、家族間の情報共有が必要だと思う。
- まだまだACPという言葉がない時代の20数年前に、家族を看取った。発覚時
は余命6月。たまたま読んだ冊子にあった尊厳死協会に相談し、本人の意思の元、
同意書を書いてもらい、本人の希望に沿った看取りを行うことができた。

【課題・ポイント】

- ACPを普及啓発することで、積極的治療が悪いイメージになっていると感ずることがある。本人の選挙を尊重することも含めて啓発するべき。
- ACPは、なんでも本人が決めなくてもいいと思う。多様なケースバイケースが認められることも重要。
- 終末期を看取るにあたって、医師や看護師等の専門職だけがわかる、本人の最期の煌めきを感じることもある。その時の本人の言葉を大事にしたい。
- 有事に家族と情報共有することのできる本人が直接書き込めるツールがあるとよい。(エンディングノートではなく、掲示できる厚紙のイメージ)

<テーマ③「複合的な困りごとに対する支援について」>

参加者：梶本委員、吉田委員、戸高委員、道端委員、小路委員、伊原委員、山本委員、

市社会福祉協議会：樋口主幹（事務局）

地域共生社会推進室：片山主幹、越川室長補佐、佐藤主査（事務局）

～架空のケースを想定し、それぞれの視点でどのように関わるか、またその課題について協議～

【想定ケース】

祖母、息子、孫娘（小学生）の3人暮らし。地上2階建ての戸建て孫娘が、学校で「臭いがする」という理由からいじめにあったことを理由に担任の先生が家庭訪問をしたことで、家屋の堆積物を発見した

【それぞれの関わりについて】

- <学校として>まず校内で支援会議を開催し、カウンセラー、相談センター、SSWに入ってもらおう。教員は、生徒に対してアプローチ。家庭のことはSSWが対応
- <CSWの立場で>学校から直接相談を受けることもあれば、地域の縁側等からつながることもある。子ども、親、祖母それぞれのつながりをあたってみた後に、学校経由でCSWのチラシを渡す、など、相談を促す
- <障がい福祉の立場から>困っているのが誰なのか、まずは本人が困っているのか、ということを考えてとともに、生命の危険など、危機介入的事案かどうかを判断。
危機介入する際に、民間は介入できないことが多いので、行政とタッグを組む。
危機介入の判断を誰がするのか、最初のアセスメントをどうするのかを課題。
- 対象者の全体像、情報収集をする。地域の情報も含め、情報把握。本人が課題意

識を持っておらず、周りが困っていることも多い。

まずは、家庭訪問できたということが、一つの強みとなる。地域でこの過程がどう見られていくか、情報を集める。

- <民生委員として>初期段階で地域のつながりを深めるのが大事。行政・地域包括・CSWなどがつなぎ先となる。
- <市民・近隣の気づきとして>想定ケースについては、ありうる話。祖母が病気になってしまうこともある、祖母の死後、家が放置されるリスクも。発見段階から対処することで、大きな問題を未然に防げる。

【体制の課題】

- 市に相談が入ったときに、一緒に考えられる体制になっているか。また旗振り役をどうするか。複雑な課題を共有し、どう対処するか。
- どこに連絡すればわからないことが問題。ある程度縦割りになるのは難しいので、ある特定の窓口にあげれば、そこがコーディネートする仕組みを目指すのかどうか。教育・医療・子ども分野の連携は壁が厚いと感じる。事例の中で動く積み重ねしかないと思っている。藤沢市がめざしている相談支援体制をどう考えるか？ヤングケアラーなどについても、市役所の中をどう束ねるのか。
- 市役所内でも、事務量増加に伴い、かつてに比べて、支援の質が保てなくなっていると感じる。ワンストップ窓口をどう置くのか考えていかねば。
- 本人たちが困っていないというケースが今後増えてくる。そういう時に市民がどう連絡し、つなぐのか、わかるとよい。

【ヤングケアラー】

- 実態把握の必要性和、CSW を巻き込み、子どもが必要な学びができない状況を大人が作るのは避けなければならない。皆が意識を持ってやっていく必要がある。
- 家事を担って学習時間が取れない場合、学校としては、民生委員や、ネグレクト事案では児相と協力しながら話を進めている。家庭訪問など、家庭とのつながりが切れないようにする。学校に行けないほど辛い状況を作らないようにする必要がある。
- 家庭内で様々なケアのニーズが増える中で、対応・供給が追い付かず、子どもによるケアが入り込んでしまう。家族関係を調整するという作業が必要。子どもたちを追い込んだり、親を追い込んだりせずに、信頼関係を作りながらチームとしてアプローチをすることが大事。

【全体を通じて】

- 入口でも支援中でも、その後のアフターフォローでも、常に地域と密着していく必要がある。地域からの情報がきっかけ。地域とも情報交換し、地域が見守り続けることになると思うので、地域の関係性が大切。

○市の関係機関だけでなく、児童相談所と、どのように関係をとっていくかも、とても大事である。

議題3. 各部会の振り返り

議題2で行ったグループ毎の意見交換内容の報告がなされた。

議題4. その他

○澁谷委員

現在、ボランティアポイントについては、65歳以上を対象としたいきいきパートナー事業と65歳未満を対象とした縁側ポイントという制度がある。この制度を利用できる施設が限定されており、同じボランティア活動をしている方でもポイントもらえる人とももらえない人がいる。担い手の発掘というテーマもあり、多くのボランティアが制度を活用できるよう制度の見直しも検討していただきたい。

○事務局

テーマ①の部会でもボランティアポイントに関する話が出た。部会内でもどういったポイント制度が良いのか、もしくはポイント制度以外のインセンティブについても検討していきたい。

○小林委員長

本日は初めて部会に分かれて会議を行った。各部会から意見交換のまとめの発表があったが、大変だと思うが、各テーマごとの議事要旨を見せていただきたい。

【次回開催日程について】

2022年（令和4年）3月23日（水）午後4時30分から

3 閉会

以上